

やましなほんがんじあと 山科本願寺跡の発掘調査

調査期間：令和2年 6月1日（月）～ 6月30日（火）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 山科本願寺跡について

山科本願寺は、文明10年（1478）に浄土真宗中興の祖である蓮如上人により造営が開始された寺内町です。周囲には防御施設として土塁や濠や堀がめぐられ、主要堂舎のある「御本寺」と、有力末寺の坊舎や僧侶などが生活する「内寺内」といった区画が存在し、またその外側には門徒や寺に関わる職人や商人などが生活する「外寺内」と呼ばれる区画が存在していました。しかし、造営から54年後の天文元年（1532）に細川晴元率いる法華宗徒や比叡山延暦寺、近江守護六角氏の連合軍の焼き討ちに遭い、その最後を迎えます。当時の様子については、「寺中広大無辺にして、莊嚴。さながら仏国のごとし」と公家の日記にも書かれるほど繁栄していたようです。現在でも土塁の一部が残っており、特に山科中央公園の土塁は、東西75m、南北60mにわたり、当時の状況をよく留めています。

2 発掘調査について

山科本願寺跡では、数多く調査が行われ、複数の建物や柵、井戸や半地下式の石風呂、園池、山科本願寺造営に関わる整地土のほか、周囲にめぐる土塁や濠、焼き討ちに遭った際の焼土などを確認しています。近年では特に、御影堂や阿弥陀堂などの主要堂舎がある「御本寺」内を中心に、遺跡の遺存状況や様相をより深く知るための「範囲確認調査」を行っています。今回の調査もその一環です。これらの調査により、山科本願寺を解明するうえで貴重な成果が相次いで発見されており、後世に伝えるために、国史跡に指定されるなどの保護が図られています。

3 今回の発掘調査成果

調査地は「御本寺」の北側で、御影堂が想定できる場所にあたります。現在の堂舎想定範囲内では初めての発掘調査事例になります。

結果としては、御影堂に直接関わる遺構や遺物は確認できず、山科本願寺に伴う土坑や井戸のほか、北側に非常に固く締まった整地土、南側に安定した地盤を確認しました。土層観察から、井戸が使用されなくなってすぐに、埋め戻され、南側の安定した地盤の高さまで、整地が行なわれていることがわかりました。出土した土器の年代から、整地した時期は山科本願寺の焼き討ちの少し前と考えられます。井戸は円形と推測でき、規模は直径約3m以上です。深さ2.5mまで調査を行いましたが、安全上の配慮から底は確認できませんでした。追加調査として、調査用の棒で確認したところ、まだ1m以上は埋土であることがわかったため、井戸の深さは3.5m以上と考えられます。

御影堂は、山科本願寺の造営直後に建立が始まっています。堂の規模は明らかではありませんが、少なくとも七間以上で、またこれに見合うような広い外陣や施設があったという研究があります。今回の調査では、当初目的としていた御影堂に直接関わる建物の柱跡などは確認できませんでした。井戸を確認したことから、今回の調査範囲内には建物が存在していないということが証明できました。また調査区の南側には安定した地盤が広がっていることも確認でき、これから調査を進めていくうえで、重要な手掛かりになるものです。また調査した場所が御影堂想定地に当たることから、確認した井戸の性格については、今後十分に検討する必要があります。

（奥井智子）

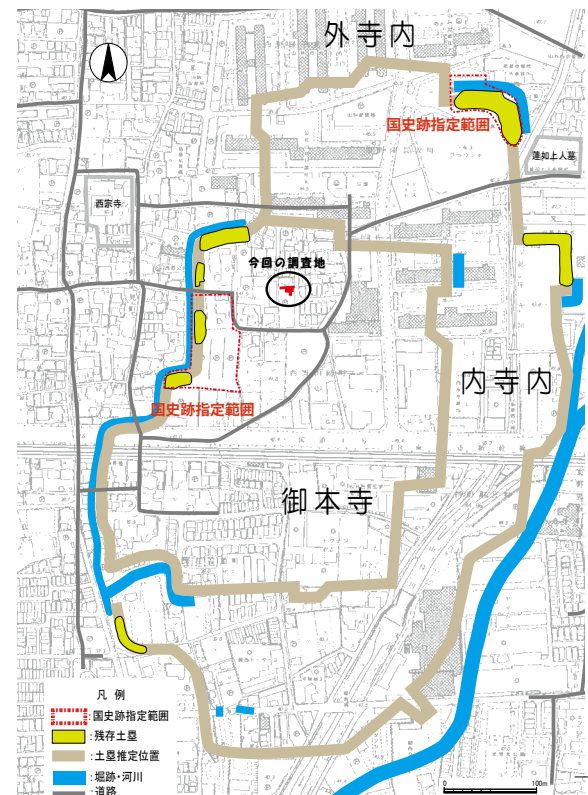
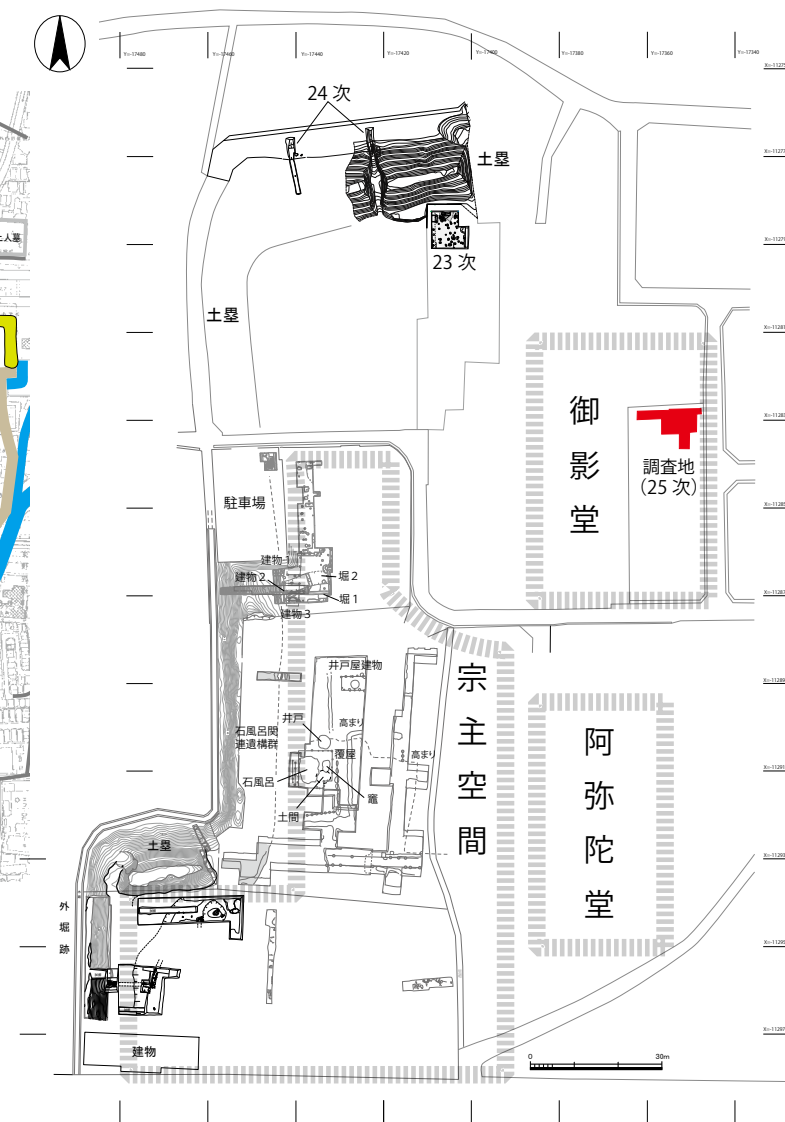


図1 山科本願寺寺域想定図



右：図2 調査地と周辺の発掘調査成果

下：図3 調査区全景（北東から）

